

平成21年5月27日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19890208
 研究課題名（和文）内分泌療法を受ける乳がん患者へのコーチング法による患者教育モデル開発に関する研究
 研究課題名（英文）The Development of Patient Education Model With Coaching the Breast Cancer of Receiving Internal secretion.
 研究代表者
 中島 恵美子（NAKAJIMA EMIKO）
 杏林大学・保健学部・教授
 研究者番号：10449001

研究成果の概要：内分泌療法を受ける乳がん患者を対象に調査を実施した。調査内容は治療中に出現する副作用症状と症状コントロールの状況、患者が必要とする支援内容、これらの結果は量的、質的データより明らかとなった。また、コーチングを用いた患者教育の効果と教育モデルの基盤を提示することができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,150,000	0	1,150,000
2008年度	1,230,000	369,000	1,599,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,380,000	369,000	2,749,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：臨床看護学

キーワード：乳がん 内分泌療法 看護 患者教育 コーチング

1. 研究開始当初の背景

本研究において対象とする乳がんは、女性が罹患するがんの第一位となっている。乳がんは早期発見により生命予後が良いことが期待されており、診断から手術療法、化学療法放射線療法、内分泌療法と短期間で次々に治療が進行するという特徴がある。その中でも

内分泌療法を受ける患者は、内服期間が4～5年と長期間に及び、更年期様の症状が出現したり、その副作用症状に対するコントロールに苦痛を強いられている現状がある。そこで、長期間に及ぶ治療に対する患者支援方法を開発し、提供することで患者のセルフケア能力を高め、治療中の苦痛緩和を図ることが可

能となる。

2. 研究の目的

乳がん患者が再発予防として受ける内分泌療法に着目し、副作用に対する症状コントロールや長期間に渡る治療継続を支援すべき患者教育支援モデルの開発を本研究の目的とし、内分泌療法開始から終了までの乳がん患者を対象に、コーチングの手法を取り入れた患者教育方法による縦断的な介入研究とする。

3. 研究の方法

- (1)研究デザイン: 量的・質的データに基づく、
- (2)方法論的 Triangulation
- (3)研究対象: 研究に対する同意の得られた内分泌療法を受ける乳がん患者
- (4)調査施設: 都内の大学病院 (乳腺外来)
- (5)調査内容: ①内分泌療法を受ける乳がん患者の治療中の副作用と症状コントロールと困難感について②治療中に必要とされる支援について③患者教育方法として用いるコーチングの効果について④①～③の調査結果より内分泌療法を受ける乳がん患者に対する患者教育支援モデルの提示をする。

4. 研究成果

- (1)内分泌療法中の主な副作用について: ①顔のほてり②汗をかきやすい③手足が冷える④動悸⑤眠りが浅い、寝つきが悪い⑥イライラする⑦鬱になる⑧頭痛、めまい⑨疲れやすい⑩肩こりや腰痛⑪体重増加
- (2)副作用に対する症状コントロールの状況: ①休息を十分にとる②食事に気を配る③気分転換 (親しい人との会話や旅行、趣味、入浴など) ④適度な運動⑤栄養補助食品の摂取⑥市販薬の利用 などにより症状コントロールがなされており、困難感としては、日常生活やその生活の質に対して感じている部分が大半を占めていた。
- (3)コーチングを用いた患者教育の効果について: コーチングの方法を活用し患者教育を実施したことに対し、患者から語られたことをまとめると次のようになった。①治療の目的を思いだして内服を継続した②治療中の目標を立てそれを看護師と共有することで励みになった③副作用のコントロールについて見直し評価することで自信がつき、自己効力感が高まった④つらいことを話し会えたことで励みとなった というように4つに集約された。

(4) 内分泌療法を受ける乳がん患者に対する患者教育支援モデルの提示：(1)～(3)の結果より 4～5 年にわたり実施する内服治療中における段階をおった看護支援モデルは次のように提示することが可能となった。

① 第一段階（治療開始時）「これまでの治療を振り返り自己の病気に対する思いを表出する」「内服治療を継続することの目標を明確にする」

② 第二段階（治療中間時）「症状コントロールに対する目標の決定」「症状コントロールの促進と充実」「症状コントロールに対する自信の獲得」

③ 第三段階（治療終了時）「治療終了後の不安の緩和と今後の希望」

これらの段階に従って、コーチングの方法を用い患者教育を実践することは効果的な看護支援の方法と考えられる。

(5) 今後の展望：本研究の実施期間が限定されており、提示した内分泌療法を受ける乳がん患者に対する看護支援モデルの有効性の検証が引き続き必要であり、より患者教育に適したモデルへと改善していくことが望まれる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

なし

〔学会発表〕（計 0 件）

なし

〔図書〕（計 0 件）

なし

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

なし

○取得状況（計 0 件）

なし

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島恵美子 (NAKAJIMA EMIKO)

杏林大学・保健学部・教授

研究者番号：10449001

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし